

吉井源太は、三椏さんさの栽培を盛んにしようと色々実験をしたり、方法を考えたりした上、その結果を広く知らせた。

明治十九（一八八六）年に「黄瑞香 栽培の事」として次のようなことを知らせようと、新聞へ記事を出した。黄瑞香は、三椏の漢名である。

「三椏の植付のためには実時かたがよく知られ、これが目下盛大におこなわれている。昨年三月中旬に挿し木を試みて比べたところ、一年目は実時による苗がよく育ち、良いように見えたが、二年目になると同じになる。むしろ挿し木のほうが脳から多く枝を出し、株がよく茂る。実時は確かに良い方法で、一升蒔けばなんと二万本が育つといわれているが、寒い地方において

ては花が咲いても実を結ばない。このことからすると、挿し木がよいかと思われる。諸君も試してみられたい」

また翌年には種子の保管についての実験結果をまた新聞に出している。

「三椏の種子を貯蔵するには水に浸しておくのが良いということはお存知のところだが、ここに源太の発明したことは、種子を水に浸すに及ばないということだ。種子は乾燥しても良いのである。というのも、この夏、鳥取県を巡回した時に実験して、五十日間乾燥した種を蒔いてみたところ、たくさん発芽した。従前のやり方で保存した種よりもたくさん生えたくらいだ」

このように源太は、これまで疑問に思われずにやられてきたことを、本当に有

効なことだろうか？ と疑問を持ち、いろいろ実験してより良い方法を探っていたことがわかる。

そして、その結果を広く知らせようと、土陽新聞や、県から出されていた勸業月報という冊子などに載せた。

同三十六（一九〇三）年十二月には少し珍しい所からの要請を受けた。伊勢神苑会というところ。これは伊勢神宮神域の美観を確保するため、内宮・外宮周辺の土地約二万坪を買い取り、神苑として整備するた

め同十九（一八八六）年に財団法人として組織された会だった。

ここに徴古館、農業館、蜜日館などが建設された。

このうちの農業館は、広く農業具を収集陳列し、標本や農業書を収蔵する目的で同二十四（一八九一）年に開館した。ここへ三椏の皮

を陳列したいと源太へ依頼があったのだ。

これに対して源太は早速承諾の返事を出す。日記にある下書きによれば、翌年一月に神宮へ参拝予定の者があるの、その者に持たせてお届けしますということだった。しかしその後、皮だけではなく苗木もという要望があったらしく、通運会社から二月五日に送った。苗木は半陰半陽の場所を選んで植えつけてくださいという注意書も添えた。これにつけたと思われるのが次の句。

三椏や二十五年の 花の春

三十年くらいとされる三椏の寿命でいうと、二十五年目くらいの自分をたえ

たようだ。  
(京大大学院研修員、京都府在住)



明治20年当時の土陽新聞